

『資本論』から鉱夫の歴史・レジャー・ 国立公園の自然保護史の研究へ（上）

村串 仁三郎

はじめに

第1期 大学院時代 1960年～69年3月

第2期 助教授時代 1969年4月～79年

第3期 教授時代前期 1980年代～95年（以上，本号）

第4期 教授時代後期 1995年～05年（以下，次号）

最後に

業績一覧

はじめに

私に大原社研の雑誌が、自分の研究回顧を書かせてくれるということは、大変光栄である。しかし私如きが何故という思いもあるが、おそらく私なりに大原社研に貢献したことへの編集部の厚意かもしれないと思いつつ、必ずしも学者としての志を十分にまっとうできなかった小学者の経験を綴った小文が若い学究たちに少しは役に立てばと筆をとった。いや今はパソコンの前に座ったと書くべきか。

【略歴】

学歴

1954年3月 都立日本橋高校卒業

1958年3月 法政大学社会学部（2部）卒業

1963年3月 法政大学大学院社会科学科経済学専攻修士課程修了（経済学修士）

1969年3月 法政大学大学院社会科学科経済学専攻博士課程単位取得満期退学

1982年3月 経済学博士の学位授与（法政大学）

職歴

1969年4月 法政大学経済学部特別助手

1970年4月 法政大学経済学部専任助教授

1980年4月 法政大学経済学部専任教授となり、現在に至る

学問とか研究を志すには、その人の歴史のはじまるところに大きな因果関係がある。私が学問を志すことを意識しはじめたのは、大学生の終わる頃であった。

東京に生まれ、大工職人であった父親を2歳で亡くして、無学な母親の手で貧しく育てられた私は、小学校にあがるまで埼玉県越谷にあった母親の実家に預けられた。この境遇が私の人生の原点だったかもしれない。

預けられた家は、貧しく厳しい農家で、しかも私の母親にとっては継母が家事をとりしきり、腹違いの母の弟が家長をつとめ、極めて意地の悪いその嫁が私の世話役であった。その叔母に「ただ飯は食わせねえ」とばかり、家事や農作業の手伝いをさせられながら、いつも他人の顔を意識し、びくびくと神経質に幼年期を過ごした。

強いられる労働、家族愛のない孤独、こうした幼児体験は、さまざまなことを私の幼い脳に刻みつけた。早く大人になって金を稼ぎ、母親を楽にしてあげたいと願った。

東京の下町で育つ貧乏人の子供たちは、一般に義務教育を終えれば、みな町工場や商店に働きにでるか、職人になるために徒弟になった。貧しい母子家庭で育ち、勉強が得意でなかった私は、賢明な姉のはからいでこうした一般的な傾向から外れて、高校に進学させてもらった。高校は、いわゆる一流の高校ではなかったが最後にできた東京府立旧制中学で、戦争直後だということもあって、旧制のパンカラが残っており、数少ない優秀な生徒は、東大や早稲田大学に進学した。教師には、優秀な先生方が多くいた。

たまたま成績はよくなかったが社会的関心を強くもっていた私は、東大生時代に詩集を出版していた詩人のT先生が率いる「社会科学研究会」に顔をだし、彼に私淑して日本資本主義論やマルクス、レーニン、共産主義運動を学ぶようになった。高2の夏に、私は、やたらにスパイや裏切り者が出てくる『ソ同盟共産党史』(全573頁)を、不思議な思いにかられつつ、鉢巻きをして眠気と退屈と戦いながら読破したが、友人が同じ夏休みに長谷部訳の『資本論』全巻を通読したと聞いて肝をつぶした。

貧乏で学力のなかった私は、大学に行くつもりもなく、人のため社会のために自分は何ができるかに悩みつつ、プロレタリア文学を読み耽り、何時しか小説家になりたいと思うようになった。

社研の先輩で成績のいい生徒は、東大や早稲田大学に行ったが、やや成績の落ちる場合は、法政大学にいくものが少なかった。私は、高3年の終わりになると、進路に悩み、プロレタリア小説を書くために労働者の中に入ることを夢見る一方、あまり体が丈夫でなかったのも、労働者の中にどっぷりとひたって厳しい生活をおくるのも不安であった。他方、文学をやるためにも先輩や友人たちのように大学に行ってしっかり社会科学、何よりマルクス、レーニンについて勉強したいと思った。

結局、決断力と実行力に乏しかった私は、小説家になるために労働者になるという方針を貫徹し、大学の夜間部に行って働きながら学ぶという折衷案を採用し、共産党系教授が多いと聞いていた法政大学社会学部の夜間部に入った。

昼は、南部工業地帯の一角港区芝白金の小さな町工場で働き、当時白金の近くにあった麻布三丁目の社会学部に通った。体力のない私は、朝6時に起きて、千住から都電に乗って延々2時間半以上をかけて白金の町工場まで通ったが、夜は12時近くに帰宅し、学びながら労働者として働くとい

うことのつらさ、厳しさを思い知らされた。

工場の経営者は、書物でえた資本家のイメージからは程遠く、想っていたより親切で、何人かいた夜学生や夜間高校生に好意的であったが、資本主義は悪であると確信していた私は、労働組合を組織しようと仲間を誘ったが、誰もついてこなかった。

こうした初歩的な労働体験は、私に貴重な経験となり、また観念的な世界と実世界のギャップを常に意識することの必要を自覚させてくれた。工場初体験も、3カ月が過ぎて、メッキ作業の際に亜硫酸ガスを吸い込んで呼吸器をいため3日ほど家で休養して中断した。私は、もう工場に出勤するのが怖くなり、そのまま工場をやめてしまった。こうして私は、「工場の中へ」という小説家志望の路線は、あえなく挫折してしまい、自分の意志の弱さに自己嫌悪を感じた。

その代わり、大学時代は、トラックの上乗りから家内工業の手伝い、食堂での下働きまでいろいろなアルバイトをしながら、実社会にふれつつ、哲学、経済学、マルクス・レーニン主義を学びつつ、もっぱら学生運動と共産党の活動に励んだ。

1955年は、戦後左翼の若者たちにとって衝撃の年であった。いわゆる六全協の時、共産党が武装闘争と独善的な方針を自己批判し、党员やシンパを驚かせ、多くの親しい仲間が党を去っていったが、私はそれを党の進歩の証しとして受け入れた。

しかし1953年に世界の共産主義運動の偉大な指導者として崇められたスターリンが死んで、1956年2月のソ連共産党20回大会でスターリン批判がおこなわれ、ハンガリーのブダペストで反政府暴動にソ連戦車が出動して弾圧したのに驚かされた。

その後スターリンの政治的な罪業を暴露したフルシチョフの秘密報告が密かに出回り、世界を震撼させた。私は、この真偽の判断に迷いつつ、一カ月ほどノイローゼになり、1週間一睡もできずに発狂寸前におちいり苦しんだ。多くの親しい仲間が党から脱落していった。私は、ソ連を中心とした社会主義が、大きな壁にぶつかり、理念、理論と違って非民主的で非人道的な独裁社会に陥っているのではないかという疑いを抱いた。

それまで自分が信じてきたイデオロギーが間違っていたのではないかと動揺した。私は、いつも問題がおきると、自分の属する政党の公式見解を鵜呑みにして正否を判断してきた。マルクスやレーニン、スターリンといった政治指導者の一言一句を無条件に正しいと信じ、疑うことは信念が弱いことであると信じてきた。

私は、大学4年生の初めに、これまでの自分を反省し、まず真偽を自分で調べ確かめる、どんな偉い人の意見でも容易に信じないと決意し、たまたま卒業論文を書かなければならないという事情があったので、卒論をとおして、それを実践してみようと考えた。

しかし私は、劣等生を自認していたので、東大の優等生のように国家資本主義論についての本を出版したり、マルクスやエンゲルスの哲学についての論文を書いたりするのではなく、大きなテーマをさけて、等身大の小さなテーマを選んだ。当時、進歩的知識人、左翼的な学者、歴史教育者の中で絶大な権威をもっていた講座派のリーダー山田盛太郎『日本資本主義分析』が論じていた「高島炭鉱の納屋制度」についての学説が、正しいか否か、実証的に研究してみようと思った。

私は、学生運動を1年間休業して卒論の作成に熱中した。長崎の高島炭鉱に1週間ほど行って、未公表の貴重な資料を寝ずに（当時はコピーなどなかったから）筆写して帰った。できあがった卒

論は「明治期高島炭坑に於ける労働者運動の社会経済史的研究」(400字×300枚)であった。

さいわい私のゼミの教授が、「オリジナリティ」ということを大事にし、自分の意見を主張することを教えてくれていたので、山田の理論を実証的に批判することができた。私のゼミの先生は、山田盛太郎の同郷の後輩で、山田と親しかったにも拘わらず、山田の本を批判的に読むことを教えてくれ、大先生の学説を批判した私の卒論を高く評価してくれたのであった。

こうして私は、偉い学者とか先生の意見に左右されずに、自分の頭で考えること、そしてそれは勝手に自分の意見を正しいと思いつむのではなく、事実をもって証明することを覚えた。私は、この時はじめて少々ながら劣等意識を克服し、自分の頭で考えることができると自信をもった。私は、学問というものに初めて目覚めた。

大学卒業後の進路に再び迷ったが、サラリーマン生活は向いていないと思い、中高の教員でもと教員試験を受けたが見事に落ちて行き場を失った。幼馴染の友人の親に頼んで鉄道郵便局に臨時で入れてもらい、ゆくゆくは本採用になって労働組合運動でもやろうと考えたが、これも年末の繁忙期のみでの採用で臨時職さえ継続してもらえなかった。田舎から出てきた腕力のある連中が、都会ッ子の仕事を奪ってまでの働きぶりを評価されて居残った。

こうした失意の中で私は、別に学者になろうとは思わなかったが、いっそのこと大学院に行って、マルクス経済学を学び、マルクスは本当に正しいのか、レーニン間違っていないのかを確かめるために、一度しっかり勉強したいと思い、高校生時代の恩師の所に行って相談したところ、「貧乏人は勉強などしないほうがいい、学問はそんなに甘いものではない」と諭され、意を決した。

大学卒業後に大学院浪人となり、アルバイトをしながら『資本論』全巻を初めて読み、マルクスの偉大さに感激し、貧乏生活と労働体験を生かした労働問題の研究を目指すことにした。

第1期 大学院時代 1960年～69年3月

法政大学の大学院に入って勉強をはじめようとした時が、あいにく安保闘争の真っ只中だったので、私にとっては、勉強どころではなく毎日がデモや集会であり、安保闘争に関する論文や新聞を熟読するという政治の季節であった。しかもその背後に、マルクス・レーニン主義青年の一般的な学習課題として、日本資本主義の歴史と現状認識、日本共産党の綱領論争や、さらに共産主義と共産党についてのマルクス・レーニン主義理論の学習があった。

日本共産党の綱領論争にからみ、1961年7月少数派の春日庄次郎ら幹部が除名され、彼らを支持して私も共産党を除名された。いままで常に党を中心に生きてきた者として、共産党からの除名は絶望的であった。友人の中には「将来の就職に不利になるから党をやめないほうがいい」と言ってくれる人もいたが、自分の信念を曲げることができなかった。私は、共産党除名組の小セクトに属し、マルクスの『資本論』、とくに『資本論』の中の賃労働の理論、労働者階級論の研究に励んだ。

1960年には中ソ論争がおき、私は、ソ連共産党の立場を支持し、社会主義の改革に期待を寄せた。そうした中で1960年から63年の大学院修士課程においては、マルクス主義の基礎的な学習に励み、さまざまな活動、少数派の活動や法政大学内の民主化運動などにかかわったが、アカデミックな研究はあまり進まず、どのように研究を進めていくか悩むだけで、研究らしい研究を残せなかった。

修士論文は、「エンゲルス著『イギリスにおける労働者階級の状態』に関する考察」を提出した。これは、当時公認マルクス主義者クチンスキーの労働者状態論に対抗して、労働者階級論をどのように研究し、記述するかという方法論をエンゲルスの『状態』をモデルとして提出するためであった。会心の作というにはほど遠く、私はテーマの選定に疑問を感じていた。

研究の進展しない焦りを感じつつ、博士課程では二つの面の研究に励んだ。

博士課程に進んですぐ結婚したが、家も貧しく生活能力もなかった私は、奨学金だけで生活できるわけもなく、アルバイトをしなければ生活できなかった。思いもしなかったことに修士課程に通っていたワイフに子供ができてしまい、困窮した生活の中での研究を余儀なくされた。それはまだ牧歌的な雰囲気があった1960年代における苦学生の一つの典型的な姿であった。

何か研究に役に立つようなアルバイトはないかと、見つけたのが中小企業調査であった。国民経済発展協会の理事をしていたワイフの女子大時代の先生が、貧乏院生のために同協会が毎年東京都から委託されていた中小企業の実態調査を紹介してくれた。私は幾つかの中小企業調査をおこなって、生活のための糧をえつつ実態調査や報告書を書くトレーニングとなった。

ちなみに私の書いた調査報告は、以下のとおりである。

『蔵前浅草地区を中心とする雑貨産業』（東京都調査資料38-6, 1964年3月）、『製本業の実態』（同上39-3, 1965年2月）、『東京都における青果物小売業の実態』（同上40-2, 1966年3月）、同じく同協会への東京市政調査会首都研究所からの委託調査では、「メリヤス工業における企業間結合と中小企業の集団立地」、「東京都の経済機能と卸売業・中小企業」（倉野精三名）（同上研究所編『東京改造についての調査（資料編）』所収, 1966年6月）。

こうした調査活動は、結果として経済実態の調査、分析の方法、執筆についての時間配分や労力配分、原稿提出の期限厳守の必要性などを教えてくれ、調査経験の蓄積、データ分析力などを身に付けさせてくれて、その後の私の研究に大きく役立った。

東大の院生たちが、指導教授や先輩のもとで十分な資金を使った調査や共同研究によって研究能力を高め業績をあげていく事例を横目でみながら、自分の大学院ではえられなかった中小企業についての調査は、私にとって大変有り難い経験であった。私は、これらの調査を不平もいわず真面目にこなした。

また日々の生活費に困窮して、ロシア語の翻訳をやって、幾ばくかの稿料を稼いだのは、切ない思い出の一つである。ルジェンコ「レーニンの帝国主義論の方法」（『経済評論』1965年9月号）やソ連世界経済・国際関係研究所編『1968年版世界経済年報』（刀江書院, 1969年6月）であった。後者は、刀江書院の編集者になっていた元都学連委員長Kの厚意によるものであった。

社会学部の先輩で当時新潟大学短期大学部助教授だった松島春海（松島栄一の実弟）が、1964年に「積雪の新潟経済に与える影響」というテーマの委託調査の下請けを任せてくれ、20万円の稿料をもらい、4カ月分の生活費を稼ぐことができた。

これらの調査や翻訳は、私の生活を支えてくれたのであり、今もこうした仕事を与えてくれた先輩、友人に恩義を感じ深く感謝している。

一方、研究の面では僅かな成果をえた。とにかく論文を書かねばならないと思い、初めて書いたものが「労働者階級の限界規定について」（院生仲間で作った法政大学大学院経済学会『経済学年

誌』第1号、1963年、誌名は私がつけた。)であった。

この論文は、当時盛んに主張された新中間層論や資本主義変質論、労働者階級変質論に反対し、また教条主義的なマルクス主義の労働者階級概念を批判して、マルクス主義の立場から真のマルクスの階級概念を明確にすることを旨とした論文であった。

しかし私のアカデミックな研究は、ほとんど進まなかった。3年間の博士課程も終わり、この頃はできれば大学で研究生活することもいいなあと思うようになったものの、就職の目処などまったくたななかったので、しばらくはオーバードクターの生活を覚悟したが、まともな研究成果は何もなく、焦燥する日々が続いた。

1966年の夏のこと、当時共産党を除名されて作っていたいわゆる構造改革派のグループに属していた私は、『現代の理論』誌の編集長で顔なじみの安東仁兵衛に「現代における労働者階級とは何か」という論文をもっていき、掲載してくれるように懇願した。彼は、「確約はできないが」と言いつつ原稿を受け取ってくれた。

この論文は、「労働者階級の限界規定について」を焼きなおして書き改めたもので、労働者階級を賃金労働者の集団として単一にとらえ、さらに従来は疎外された階級として静態的にしかとらえてこなかった労働者階級を、客観的な生産関係から即自的な階級としてとらえ、こうした階級が、自らを闘う階級と自覚して組織し運動し自己疎外を止揚する対自的な階級として、主体的にとらえることを主張した。この主張は、公務員や教員、多くの中間管理職層、大量の技術者層、銀行員などのホワイトカラー層を新中間層ととらえる見解を批判するものであり、真にマルクス主義的な階級理論を提起しようとするものであった。

その後、一か月ほどして『現代の理論』(1966年8月号)の巻頭論文に私の論文が掲載されているのに驚かされた。安東仁兵衛いわく。「君の論文を長洲(一二)さんや井汲(卓一)さんにみてもらったら、とても面白いと言ってくれたので掲載した。」

論文掲載後、編集部に寄せられる読者カードの中に、京都大学教授福留正美などの大先生や著名な活動家からお褒めの言葉があった。私は、学部、大学院の指導教授からは破門され、指導教授から論文作成の指導を受けたり、論文を評価してもらうことなどなかったから、読者から寄せられた評価、時には拙稿を引用している論文や本をみて、自分ではそれほどいい論文と思っていたが、この事実上の処女論文によって、自分の劣等感を払拭し、自信をえることができた。

安東仁兵衛からは、自由に載せてやると言われ、立て続けに書いたのが、「現代資本主義における管理労働者—その理論的考察①」、「労働運動における管理労働者の役割—現代資本主義における管理労働者の理論的考察②—」(『現代の理論』1966年12月号、1967年2月号)であり、「現代資本主義における労働者の欲望理論—労働者の生活過程論序説その一—」、「『資本論』と労働者階級の欲望理論—労働者の生活過程論序説その二—」(『現代の理論』1967年6月号、7月号)であった。それぞれ結構注目され、話題になった。とくに宮崎犀一は、1967年12月の週刊『エコノミスト』(12月26日号、毎日新聞)の年間論壇時評で、後者を取り上げてくれた。

『資本論』100年、『帝国主義論』50年の記念出版もさかんであったが、…諸雑誌が追求する現代的な課題の発生史的研究に十分になっているかどうかは疑わしく、ここでも、たとえば村串仁三郎「資本論と労働者階級の欲望理論」(『現代の理論』7月号)、拙稿「アンドレ・ゴルツ—変革欲求の

組織化」（『思想』7月号）と媒介させての、接近方法の体系的な結集が必要である。」（65頁）と指摘し、私の欲望論を高く評価してくれた。

ようやく論文を書くことが怖くなくなった私は、「研究で注目されたかったら、当代の大先生にチャレンジしなさい」と教えてくれた先輩の言葉に刺戟されて、「『労働経済論』の方法—隅谷氏の「賃労働理論」の方法について—」（『経済評論』1967年11月号）を書いた。

マルクスの学説、主張を正当なものと思わず、修正せずに、マルクス的に解釈し、不十分な面をマルクスの精神で発展させるべきであると考えていた当時の私は、マルクスの理論を基本的に利用しつつ、マルクス主義を主張せず、マルクス理論を適度に再構成して労働経済論を提唱する隅谷三喜男の立場を認めることができず、慇懃無礼に批判したのであった。

「自分がいい論文だと思っても客観化して、他人が評価してくれなければわからない。思い切って発表しなさい。」との先輩の言葉が、私を前に押した。

こうしたことを今書いているのは何も自慢のためではない。私は、劣等感にさいなまれながらも、いつかいい論文を書くぞと心に秘めて、時には大言壮語しひたすら勉強に励んだが、学会で発表したり、雑誌に投稿したりしてこなかった。恥をかいたり、失敗したりするのを恐れたからである。若い学徒に私の経験が少しは役に立つかも知れない。

オーバードクターの時期に大学の教員募集に度々応募したものの、『現代の理論』のような政治誌に載せた論文は、内容の是非はともあれ、学術論文として評価されにくいのは無理からぬことであつた。

私の思想に大きな転期がおとずれていた。1966年に文化大革命がおきると今度はソ連支持をやめて中国共産党を支持し、また1968年には、期待していたチェコ社会主義の改革がソ連の戦車によって弾圧され、ソ連共産党への信頼を根本的に失った。私の社会主義認識は完全に動揺し、マルクス主義への疑念を深めた。

その頃は全共闘運動の最中であつて、紛争大学であつた法政大学経済学部では、教員の他大学への移動があり、教育改革の一環として教員の増員につとめていた。1967年に法政大学の経済学部で社会政策系の助手募集があり、私は、社会主義運動への幻滅の裏返しとして、学問への関心を強めていたので、それに応募した。

受かるツテも自信もなかったが、自分の出身校の助手募集に一度もトライしないのも情けない話だと思い、冷やかして応募したのであつた。足を組んで横柄に面接を受けたが、「君の論文は経済学の論文として読めないが、どう思うか」と質問されて、「あれを経済学の論文として読めるかどうかは、その人の経済学についての認識の問題であり、私は、政治経済学の論文として提出した。」などと答えて、見事に不採用となつた。

しかしオーバードクターも大詰めに入ってきて、大学の職には有りつけないのかと諦めつつあつたが、ふと気が付いたのが、学部の卒業論文であつた。汚い字の生原稿を助手や講師の採用試験に提出したが、まともに読んでもらえるはずもなかった。この論文も活字にすれば少しはチャンスになるかもしれないと、発表の場を探した。

たまたま法政大学短期大学部の専任をしていた大学院の先輩石垣今朝吉に論文の掲載を頼んだところ、こころよく掲載してくれることになった。私は、400字原稿用紙300枚の卒論を急遽、三つに

分けて、調査報告書の作成で鍛えた分析力と筆力で一気に書き直し、「高島炭鉱における納屋制度の成立過程—明治期高島炭坑の労務管理近代化過程の分析（上）」と「明治中期高島炭鉱における納屋制度の構造—明治期高島炭坑の労務管理近代化過程の分析（中）」とし法政大学短期大学部『商経論集』（それぞれ第6号，1968年3月，第7号，1969年3月）に発表することができた。

1968年に、私は、大学での研究をあきらめ、某大産業別労働組合連合会の調査部書記にきまり、昼は右翼系の労働組合で糊口をしのぎ、夜は左翼的な労働問題研究者として生きていこうと決心していた。それでも、大学紛争が激しい中、教員の移動が多かったため、再度法政大学経済学部で社会政策系の助手募集があり、最後のチャンスとばかり、誰も引き合いの先生がいなかったのに、可能性はまったくないとは思っていたが、今度はちゃんとしたアカデミックで実証的な研究論文で応募し、いそいそとしおらしく面接に挑んだのであった。

さいわい合格して1969年4月に専任の特別助手に採用された。論文は、察するところ、高島炭鉱とそのもとでの納屋制度に関する初めての詳細な実証的な研究と、納屋制度の資本主義的な側面を強調し講座派の御大山田盛太郎の半隷農的労働制度説への批判が評価されたようである。後日談であるが、「面接の態度がよくなった」ということも一因だったと聞いて、失笑を禁じえなかった。

第2期 助教授時代 1969年4月～79年

ようやく飯が食えるようになり、安心して研究することができるようになったので、本格的にマルクスの『資本論』における賃労働論をしっかりと研究してみたいと思った。これは、これまで『資本論』やマルクスの手稿など虫食いの読み、何事も中途半端にしか研究せずに、2、3カ月で論文を書き上げて、賃労働論を展開してきたことへの深い反省であった。

こうして私は、大学院に入った時からの課題としていたこと、すなわち労働者階級論、労働問題の基礎理論ともいべき『資本論』の賃労働理論、さらにマルクスがなしえなかった、『資本論』の続編として残したより具体的な『賃労働論』の構築を目指すことにした。それはまた、学生時代以来、信じてきた教条主義的なマルクス主義を克服し、現実の社会主義や共産党の運動への疑念を念頭におきつつ、真のマルクス理解に達しようとするためであった。

私にとって2回目の『資本論』研究がはじまった。ほぼ2年間、『資本論』の研究に没頭し、その成果が『賃労働原論—《資本論》第一巻における賃労働理論—』（日本評論社，1972年6月）であった。

本書は、あまた存在する一連の賃労働の理論、大河内一男、岸本英太郎、隅谷三喜男、あるいはいわゆる宇野派の労働問題研究者たちの理論を批判するための基礎を提起したものであった。

若輩の「資本論における賃労働理論」の提起は、各方面から注目され一定の評価をえた。先学の下山房雄は、『日本読書新聞』（1972年10月2日号）で荒又重雄の『価値法則と賃労働』と対比しつつ、拙著は「書きおろしの著作であって、『序説 賃労働論の方法』の部分を除けば、労働力商品を端緒とし窮乏化で結ばれるその展開は、ほぼ資本論四章以降のコンメンタール」であり、「マルクス主義の政治経済学批判体系の上向展開として理論構成をおこなう」ことを目指し、「労働経済学批判」を意図するものと批評した。

また同僚の萩原進（法政大学発行『ユニベルシタス』1972年秋号）、労働運動家渡辺武平（『月刊労働問題』1972年10月号）が好意的な批評を寄せてくれた。

1974年6月には隅谷三喜男が、「労働問題研究の基本的視角—賃労働の理論をめぐる—」（『思想』No.600）の中で、これまでの「賃労働の理論」をめぐる学会の業績を総括されつつ、私の『賃労働原論』の問題性を批評してくれた。

この論点に詳しくふれられないが、隅谷は、「『資本論』の論理に忠実な賃労働論という点では、村申仁三郎『賃労働原論』をあげなければならない。」（前掲誌、13頁）と、賃労働理論の「村申説」を特徴づけ、私の研究意図を紹介しつつ、しかし「資本の論理展開」とは別に「賃労働の理論」を展開し、これを『労働経済学』とする隅谷への私の批判（1967年の拙稿「『労働経済学』の方法批判」）は、誤読にもとづく批判であると斥けた（同上誌、14頁）。

確かに隅谷の指摘するように「村申『賃労働原論』は、『資本論』第一部に対応する部分しか展開しておらず、第二部、第三部については簡単な展望が与えられているにすぎない。」（同上誌、16頁）。したがって具体的な隅谷批判は未展開であるのは当然であった。ただ私の隅谷批判が、隅谷理論の誤読に基づくものであったとは今でも思われない。

私は、『資本論』研究で、初めてマルクスの経済学（私の言い方では、ポリティカル・エコノミー＝政治経済学）について本格的な研究を経験した。その結果できあがった『賃労働原論』は、『資本論』の賃労働論コンメンタールみたいなものだが、私がえた大きな研究成果は、幾つかあった。

それは、第1に、マルクスの唯物論、いわゆるマルクスの唯物史観、初期マルクス、第2に、一般的な『資本論』の理解に加え、『資本論』第一巻の賃労働の理論、第3に、いわゆるマルクスのプラン問題に関連して、マルクスが『資本論』の続編に残した賃労働の理論の方向性、などについて私なりに理解を深めたことである。

この研究でえた私の大きな教訓は、マルクスの『資本論』、さらにマルクスの思想の総体が、一筋縄では理解しかねるというごく当然のことであった。これまで安易にマルクス主義を云々してきたが、マルクスの真正にして正当な理解などというものは、決して容易ではないことに初めて気づかされた。

そして結局、マルクス主義というものは、マルクスを信仰する人たちが、マルクスの哲学、経済学、政治思想を基本的に正しいと信じつつ、マルクスの果たせなかった理論を再構成したいと願う信仰心であることがわかった。しかし私自身は、この信仰心を排して、あくまで自分自身が正しいと確信するマルクス理解を提示することを目指したいと決意した。

確かに種々あるマルクス研究は、大枠では一致する部分が少なくないが、基本的には研究者ごとにそれぞれマルクス理解を異にしており、真理の体系的な統一的理解など到底ありえないと自覚するようになった。

例えば、資本主義が発展すればするほど労働者は窮乏化するという『資本論』第一巻七編のいわゆるマルクスの窮乏化理論について言えば、マルクスの理論展開は一貫性と厳密さに欠け、信仰心の薄い立場から読めば矛盾だらけの理論と理解できるし、マルクスになったつもりで肯定的に理解して解説しても、他の同類の論者との一致など見つけようがなかった。結局、私は、最終的にマル

クスの窮乏化論を全面的に肯定的に論じてみたものの、決して納得的な結論などえられなかったし、著作で書きはしなかったが、むしろマルクスの理論の不十分さ、曖昧さ、欠陥を自覚させられることになった。

私の『資本論』研究でえたもう一つ重要な教訓は、唯物史観についての理解であった。とくに初期マルクスの研究をへて、『資本論』を読むと、その経済主義的、経済決定論的な傾向に大きな疑問がわいた。この『資本論』研究過程で、私が注目したのは、マルクスの欲望論であった。

マルクスの欲望論については、『資本論』第一巻一編三章の「労働力価値論」の理解にかかわる問題から発していた。つまり「労働力の価値規定は、他の商品の場合と違って、ある歴史的な精神的な要素を含んでいる」、そして労働力の価値の大きさを規定する労働者の「必要生活手段の平均範囲」が「自然的欲望」だけではなく、「それ自身一つの歴史的産物であり、したがって…一国の文化段階によって定まり」「主として、自由な労働者階級がどのような条件のもとで、どのような慣習や生活要求をもって形成されたか、によって定まる」「必然的欲望」によって規定されるというマルクスの説明である（引用句はすべてマルクスの言葉、拙著、46-50頁を参照）。

こうしたマルクスの考え方は、そのままそもそも唯物史観、あるいは唯物論が果たして正しいかというマルクス、あるいはマルクス主義の根幹にかかわる問題を提起している。この労働力価値論は、教条主義的なマルクス主義者の硬直的な解釈から、初期マルクスやヘーゲル左派、実践の哲学、さらにグラムシなど柔軟な研究者によって理解のほどに極端な差異が存在していた。

私は、『賃労働原論』作成の副産物として、初期マルクスの欲望論を強調し、物質的な過程への欲望、人間の意識、政治、国家の反作用の重要性を主張する「マルクス欲望論の問題点と研究視角」（上下）、『経済志林』40-4、41-1、1972年11月、1973年1月）を発表した。

私のマルクス欲望論については、一部の唯物論者から批判をえたが、多くの労働問題研究者、社会政策論の大家京大教授岸本英太郎、賃金論の先学大阪市立大教授吉村励、以前から教えを受けていた法大社会学部教授の芝田進午などから激励の手紙をもらい、研究への評価をえた。

例えば吉村励は、若輩の私にわざわざ長い手紙（1973年2月28日付）で、自分が「社会的欲望の質と量という問題にブツカリながら、それ以上の展開をすることができませんでした。その点で貴兄の野心的労作を読ませていただき続稿を強く期待します」と励ましてくれた。

しかし当時の私は、マルクスとの決定的な対決を回避してしまい、マルクスのもっていたおおよそ弁証法的でない経済主義的な欠陥、唯物史観の一面性をえぐりだし、唯物論でもなく観念論でもない第三の哲学、歴史観を構築することができなかった。

せっかくマルクス「欲望論」の研究でえた前進にもかかわらず、マルクスの理論に懐疑的となっていた私は、それを突破できなかった。

しかし一方では、『資本論』続編における賃労働理論の研究を少しでも進めようとささやかに研究をすすめた。

その一つの試みとして、大学の通信教育の『社会政策』のためのテキスト執筆を依頼されたので、社会政策論を研究しつつ、従来の社会政策論が欠落していた国家論を提起すべく、マルクスの国家論を論じ、『資本論』の続編で行なわれるべき『賃労働論』のメモを作ってみた（通信教育テキスト山本潔・村串仁三郎『社会政策』法政大学通信教育部、1973年8月）。

私の執筆部分は、前編であるが、そこで「社会政策の前提理論（一）」である「賃労働についての政治経済学」と題し、前半に「賃労働の一般理論」を論じ、後半で「賃労働の特殊理論」として主に「階級闘争の経済的必然性」、「階級闘争の諸形態」、「階級闘争の方法と組織」について論じたが、まだ余りにも抽象的であった。

「社会政策の前提理論（二）」である「国家の理論」として、マルクスの国家論を論じた。私の国家論は、いわゆるマルクスが構想した政治経済学批判プランの国家論のアウトラインを構想し、従来の社会政策論が国家論なしに経済主義的に論じられてきたことを批判し、賃労働関係、ひいては労資関係への国家の介入のメカニズムを明らかにしたものである。国家の媒介なしに賃労働関係はなりたたないし、国家論なしに賃労働関係は、抽象的空論であるということを示した。

このテキストは、山本潔の後半の部分を削除して、「日本賃労働政策史」を加えて『賃労働政策の理論と歴史』（世界書院、1978年5月）として独立させて刊行した。

「日本賃労働政策史」は、先の「国家の理論」を、日本における資本主義の形成過程（徳川時代から明治期）における賃労働関係の形成、それに対する国家の政策を詳論し、歴史的に実証しようとしたものである。

こうした立論に対して同学の池田信が、「従来の社会政策論の枠を破ろうとする現在の営為の鋭意のこころみがどの方向を示しているかを教えている」、かつ日本における賃労働政策史の研究を含めて「著者が従来の社会政策学者の多くを支配してきた講座派的な日本国家論を大胆に放てきしたことは、研究の進展にとって積極的な意義をもっている」（池田信『賃労働政策の理論と歴史』についての書評、『図書新聞』1978年9月16日号）と評価してくれた。

ここでも私は、マルクスの国家論を研究すればするほど、人間の意思、政治、国家の役割を軽視、物質的な側面を強調する唯物史観の欠陥を明確に意識しなければならなかった。そして未完のマルクス賃労働理論を再構成する困難さを自覚させられ、唯物史観の矛盾をぎりぎりのところまで追い込み、唯物論でもなく観念論でもない第三の歴史観に近づけていたが、相変わらずマルクス主義者を自認しつつ、マルクス理論への確信を失っていった。

マルクス主義的な『賃労働論』の再構成を意図するもう一つの試みとして、これまで書きためてきた論文を一冊にまとめてみることであった。これが、『賃労働理論の根本問題』（時潮社、1973年3月）であった。

飯田鼎は、本書に対していみじくも「賃労働論の体系化については、必ずしも十分に成功しているとはいえない」（『読書人』1973年8月13日号）と批評されたが、もちろん私は、そうした目的のための個々の試論をまとめたものであるから、体系化が成功していないとの飯田の批評は当然であった。

しかし改めてこれまでの論文を一冊に纏めてみると、私の賃労働論の体系的な展開への予備的な作業がそれなりに進んできていることが読み取れる。例えば、倉野精三（ペンネーム 浜川浩）は、拙著への書評で、「これらの論文が個々に発表された段階では、著者の論理の体系をキチンとつかむことができなかったのであるが、こうして一つにまとめられてみると、著者の方法と体系が理解できるのであって、…それぞれの論文は今日の既存の労働階級論および労働者階級分析の理論の不十分さ、弱さ、欠陥を、するどくついでおり、労働者階級分析の理論の今日の混乱を抜け出す上

で、積極的意義をもつものとして、われわれに迫ってくるのである。」(『現代の理論』No.115, 1973年8月号)と指摘した。

こうした批評は、私の意図を十二分に理解してくれた望外の喜びであり、励ましであった。そのほか、同学の筆宝康之(法政大学発行『ユニヴェルシタス』1973年秋号)、荒又重雄(『日本読書新聞』1973年6月18日号)、工藤正(『日本労働協会雑誌』1973年9号)などからの批判的な論点も含みつつ好意的な批評があった。

こうして私は、新進の賃労働論学者として広く知られるようになったが、『資本論』研究によってマルクスの理論への疑問を膨らませていたため、マルクス主義的な賃労働の理論の具体化に躊躇していた。『資本論の第二巻、第三巻における賃労働の理論』の草稿をほぼ執筆し終わっていたにもかかわらず、『賃労働原論』の続編としてそれを出版することができなかった。

1960年代末から70年代にかけて席卷した全共闘運動に影響されて、私は、労働運動に飛び込めなかった後ろめたさもあって、自分の研究を労働運動寄りに軌道修正していた。

そのための仕事の一つは、労働運動への支援を研究や理論の面で果たそうとしたことであった。『現代の理論』への投稿(「エンゲルス・コンメンタール③(イギリスにおける労働者階級の状態)」1975年11月号、「マルクスのプロレタリアート論」1976年9月号)や労働組合関連の雑誌への寄稿(「国民春闘再構築の基礎的視角」全通学習誌『あすど』1977年1月号、「賃金とはどういうものか」労働者学習協会編『77闘う春闘を』所収, 1977年2月、「生活できる賃金とは何か」労働者学習協会編『78闘う春闘を』所収, 1978年2月)が増えた。

こうして労働問題の分野でも一応名をなすことができたが、他方、密かにマルクス主義への疑問は、理論研究から実証研究へ私を傾斜させていった。それは、マルクスの既存の抽象理論を弄ぶだけでは、マルクスの『資本論』以降に残された賃労働理論の構築は不可能であり、したがってまず賃労働の歴史と現実の研究をおこなわなければならないと考えたからであった。

そのため私は、二つの方向の研究に取り掛かった。その仕事の一つは、日本における賃労働史研究であり、とくに日本的な労資関係をなす鉱山における友子制度の研究であった。もう一つの仕事は、友人が電機労連本部にいたことから、電機産業における労資関係の実態研究であった。

前者については、高島炭鉱における納屋制度史の研究に加え、大学卒業直後、法政大学の歴史学研究会(学生組織)をつうじて米騒動の調査をおこなって土地勘のあった常磐地方の諸炭鉱における飯場制度の研究をおこなうことにした。

これは、制度の成立から解体までの歴史的な発展過程を追求するという私の研究スタイルにしたがい、ほぼ3年間を費やして、常磐地方における飯場制度の発展史を資本・経営との関係の分析を通じて解明した。これが、「常磐地方における飯場制度の成立過程」(『経済志林』42-4, 1975年1月)、「常磐地方における飯場制度の展開」(同誌43-2, 1975年7月)と、未発表の「常磐地方における飯場制度の解体過程」であった。

1976年5月に、これらの論文に既存の高島炭坑の2論文と「高島炭坑における納屋制度の解体過程」(『経済志林』42-1, 1974年1月)を加えて、『日本炭鉱賃労働史論』(時潮社, 1976年5月)として出版した。

常に私が批判の矛先を向けていた隅谷三喜男からは、研究史の中につきのように位置づけをして

もらった。

「大山について納屋制度の問題を、高島炭坑および常磐地方の炭坑という個別資本の段階までおりて、納屋制度の成立と崩壊の過程を考察したのは、村申仁三郎であるが、村申は炭坑資本を分析し、そのもとでの賃労働関係の全構造を考察しており、実証的にも方法論的にも、鉱山労働の研究として現段階の水準を示すものといえよう。」（『日本賃労働の史的研究』333頁、御茶の水書房、1976年10月）。

ついで日本炭鉱史研究の先学吉村朔夫から、「納屋制度の個別分析に集中した炭鉱賃労働関係の実証的解明という著者の課題は、労働者視点を堅持した豊富な資料駆使によって、高い水準で達成されている。本書は、今後の炭鉱労働史で要望される個別分析—地域分析—全国分析への拡大—また納屋制度以前と以後を貫く鉱山労働制の展開分析の確固たる礎石となる貴重な労作である。」（週刊『エコノミスト』1977年2月15日号）と暖かい批評をえた。

そのほか、同学の松崎義（『日本労働協会雑誌』1977年4月号）、西成田豊（『歴史学研究』第448号、1977年9月）、萩原進（雑誌『法政』1977年2月号）から、手厳しい批判も少なくないが、高い評価をえた。こうして私は、単に賃労働理論の研究者だけでなく、日本炭鉱史の実証研究の面でも一般に認知されるようになった。

実証的な研究成果を注目されて、1970年代後半に、日本の近代化のケーススタディを世界に紹介する国連大学の『日本の経験プロジェクト』に招かれ、国連大学から「日本の石炭業の技術と労働」（小冊子、1979年）、「満州への石炭業技術移転と労働力」（小冊子、1981年）を出版した。

私は、この研究をつうじ、日本の近代化の特殊性、日本的なものにっそう関心を強め、日本の鉱山にみられた特殊な鉱夫集団・友子の研究への関心を固め、それを1980年代の主要な研究課題とした。

もう一つの仕事は、電機産業における労資関係の実態調査への参加であった。1978年4月から電機労連の『電機産業の中期的雇用展望』の研究プロジェクトに参加し、翌年11月に私の担当した研究が「電機産業の海外進出と現地雇用」として発表された。また同年7月に「電機産業の海外進出の現状と雇用」（『季刊電機労連』Vol.43）を書き、以後この問題を1980年代の研究課題とした。

第3期 教授時代前期 1980年代～95年

1980年に教授に昇格したが別に給料が特別に高くなるわけではなかったが、研究には資金が必要であり、大学間も学会間もなくもっぱら一人で研究してきた私としては、電機労連をスポンサーとする研究は魅力的であった。

電機産業に関しては、日本企業の多国籍企業化の傾向に早くから注目して、1981年7月から電機産業労働問題研究会名で「わが国電機企業の多国籍企業化と国際分業」（電機労連企画部『調査資料月報』69号、70号、72号、73号、75号、76号、77号、78号、79号、1981年7月～82年6月にわたり9回）を連載した。

1982年には「日本の海外進出と国内雇用問題」（『賃金実務』12月1日号）を書き、1983年には、日本電機産業の多国籍企業化と現地での労使関係についての本格的な研究課題を自分に課するため

に、未熟さを知りつつ「日本電機企業の多国籍企業化に関する若干の実態分析（1）」（『経済志林』50-3・4号、1983年3月）を發表し、「進出する日本電機企業の多国籍企業化」（『労働レーダー』1983年6月号）を書いた。

その後、1986年4月に電機労連『海外における日系電機企業の雇用と労使関係に関する調査』（アンケート調査編）をまとめ、電機労連による二つの海外調査に参加した。その報告書は、『海外における日系電機企業の雇用と労使関係に関する調査』（オーストラリア、シンガポール、マレーシア3カ国の現地調査報告、1986年3月）と『海外における日系電機企業の雇用と労使関係に関する調査』（イギリス、西ドイツの現地調査報告、1987年9月）であり、ほぼ全文を私が執筆した。

しかし電機産業の多国籍企業化と現地労使関係についての本格的な研究をはじめてみたものの、アカデミックな問題としては興味深かったが、多国籍企業の実態調査が結局は大企業に依存しなければならず、批判的な研究が難しく、大企業の御用学者になりかねないので、研究を中断して初心に戻り、日本の労働問題の歴史、賃労働史、友子研究に完全にシフトしてしまった。

当初、鉱山における納屋・飯場制度といった特殊な労働制度、友子という鉱夫の職人的組合制度、それに日本の労働組合運動で最も戦闘的であった鉱夫労働組合についての三部作を完成しようと計画を立てた。

しかし全共闘時代の流れに刺戟され日本の過激な労働組合運動の伝統を探るべく開始していた日本の鉱夫労働組合史の研究を中止して、1980年に「友子研究の回顧と課題」（『経済志林』48-3、1980年12月）を發表し、これまでほとんど体系的に研究されてこなかった友子制度の全面的な研究開始を宣言したのであった。

その後、毎夏、夏休みを利用して各地の鉱山所在地を訪れては、友子資料を収集して廻った。私の研究スタイルは、友子制度の発生から消滅まで友子の歴史を発展段階的にかつ実証的に分析することであった。特別な方法論や理論仮説を立ててそれを実証しようとはしなかった。むしろクソ実証主義に徹しようと決意した。

この視角の根底には、これまでしばしばマルクスを引用してきた学問スタイルを改め、理論が先にあって歴史、現実をそれにあわせようとする教条主義をやめて、自分の頭で考え、そして、日本が高度成長をなしとげ、外国から日本的なものが評価されている中で、伝統的な友子制度が何故、如何にして発達してきたのかの秘密を探ることであった。

友子に関する一連の論文は以下のとおり。

1982年3月「徳川時代の金掘り友子に関する考察」（『経済志林』49-4）。

1984年7月「徳川期石炭業における技術、経営、労働」（同上誌、52-1）。

1985年3月「明治期における友子制度の普及」（同上誌、52-3・4）。

1985年7月「明治期における友子制度普及の必然性」（同上誌、53-1）。

1985年10月—86年7月「明治期における友子の組織と機能」上中下、同上誌、53-2、3・4、54-1）

友子の研究も、これまでまったく手薄だった江戸期、明治期の研究を終えて、私なりの友子のイメージを描くことができた。こうした折り、1986年、87年とイギリスに留学をする機会をえて、さまざまなカルチャーショックをうけ、また従来のマルクス主義、マルクス観、あるいは日本観、日

本研究のあり方など、日本から離れヨーロッパの文化や学風にさらされて、これまでの自分を大いに反省する機会をえた。

例えば、1956年のハンガリー動乱は、イギリスのBBCのドキュメンタリー・フィルムでは、ソ連、ハンガリー共産党支配から解放をもとめる民衆の革命運動として放送された。私は、大きなショックを受けた。これまで日本で報道されてきた社会主義の現実が、ヨーロッパではまったく異なったリアリティで論じられていた。イギリスでは、ロシア革命への幻想などなく、1848年や1871年のバリの革命さえ、美化されていなかった。私のマルクス主義観は静かに深く壊れていった。

私は、友子の論文を、イギリス留学中に手を入れて、帰国とともに1989年8月に『日本の伝統的労資関係—友子制度史の研究—』（世界書院）として刊行した。その序文で私は、遅ればせながらはじめて、「本書によっていわゆるマルクス主義というものに完全に決別することができた」（はしがき）と述べ、脱マルクス主義を宣言した。

その意味は、幾つかある。私は、これまでの自分のマルクス研究が全部間違っていたとは思わないが、何よりマルクス主義という呪縛から解放されたかったからであり、大学でも無責任にマルクス主義の正しさを講じてきたことへの反省のためであった。その代わり私のマルクス観は、彼の思想を固定的に捉えず、修正すべきは修正して利用するという、ごく当り前のものになった。

拙著に対する最初の批評は、1990年10月（『日本労働研究雑誌』No.371）に私が友子研究の先学として尊敬しかつ友子研究の導きの糸としてきた『友子の社会学的考察』の著者松島静雄からのものであった。

松島は、自分の経験から「文献を中心に友子の実態にせまることが、いかに労多くし困難な仕事であるかがわかるだけに、まずこの労作を書かれた村申氏の努力に対して最大級の賛辞を呈したい」と述べた。この言葉は身に余る光栄であった。

さらに松島は、これまでまったく欠落していた徳川後期と明治期の友子の実態を実証したことを「高く評価出来る」と評し、また私の松島への「友子を歴史的発展の中で特徴づけていない」、鉱山労働市場の構造分析を欠落させ、「技能養成機能」を軽視しているという批判に対して「事実そのとおり」と謙虚に認めた。

その上で松島は、「本書を読み終えて何かほのぼのとした印象を感じるのは、友子を歴史的に追いつながらも、鉱夫たちが如何なる生活を送っていたか、人間性に関心をあてる著者の鉱夫に対する愛着の深さが感じ取れるからだと思っている。」と付け加えた。

また別のところであるが松島は、友子を「相互扶助団体」とする私の批判を受け入れ、ほぼ私の鉱夫の同職組合という友子概念を認めてくれた（平凡社『大百科事典』の友子の項）。私は、この謙虚さに頭が下がり、自分の研究態度の粗雑さ、傲慢さを反省させられた。

さらに鉱山労働史の同学二村一夫、東條由紀彦からの拙著への積極的な批評があった。

二村は、『歴史学研究』（1992年2月）で拙著を高く評価したうえで、二三の批判点を指摘した。その一つは、私が「友子を同職組合としながら、その職業範囲がいささか不明確」とであると批判した。私が「坑夫」という用語を使わずに「鉱夫」を使用したこともその一因らしい。しかしその職業範囲の問題は、時代によって異なり、その範囲はルーズになっていくのであって、その曖昧さはむしろ実態の中にあるといわなければならない。

つぎの批判は、友子の勤勉と労資一体という職業倫理に関するもので、私の指摘する職業倫理が実態とギャップがあると批判している。確かに批判のとおりであるが、それは職業倫理が形式化している実態そのものを表していると解釈されるべきで、職業倫理の建前を強調するつもりはない。

最後に私が、友子の共済活動を軽視したと批判されているが、もちろんそのつもりはない。ただ共済の役割が歴史とともに形式化し、軽くなってきたことを明らかにしただけである。

東條は、『日本労働研究雑誌』（1992年1月号）で「本書は、これまで研究の手薄であった幕末から明治の友子について、広範な史料に基づき克明にその実態を明らかにした労作である。今後の友子研究においては必ず参照される文献となると思われる」と指摘した。そして「本書の論旨については、その議論の骨格において、評者は著者に、基本的に同意すると」としながらも、拙著のもつ弱点と「誤り」を指摘した。

すなわち友子を「クラフトギルド的な同職組合」とする私の友子概念規定に対し、「クラフトユニオンの同職組合」と「呼んだほうがすっきりする」と批判する。私の「クラフトギルド的な同職組合」の概念規定の不明確さは認めるが、基本的にはこの対立はまさに見解の相違であろう。

また「友子のような日本にあっては特異な自治組織が何故成立しえたか」という問題で、「クラフトユニオンの同職組合」としての友子は、「自らを物質的・精神的なものを含めた鉱夫の欲望充足に貢献させていたからこそ発達したのだ」と私の友子成立の必然性論を批判した。しかし私は、友子の発展が東條の指摘する要因にあったことを強調しこそすれ、否定したことはない。

また私の「飯場頭」の性格把握について、「オリジナルな飯場制度に対する『否定的』な評価」だと批判する。しかし東條の批判は、拙著の不十分さから生まれたといえるが、拙著およびその後の一連の拙稿を読めば、東條の批判は決して当たっていないと指摘しておきたい。

友子研究の補足としてイギリス留学中に、イギリスにおける友子類似組織の研究を試みた。すでにイギリスにはブラザーリング、あるいはブラザーフッドという鉱夫組織が存在することは知っていたので、友子論文の推敲をおこないつつ、1986年、87年にかけて、ブラザーリングの研究に没頭した。

しかしよそ者の限界は大きく、原資料の発見が難しいだけでなく、イギリスにおいても、労働組合とは少々ことなつた友子のような組織・ブラザーリングへの関心は弱く、資料の蒐集がほとんどできなかった。外国人による原資料蒐集の困難を自覚し、本格的な研究へ進むことを諦めた。若い研究者への刺戟にでもなればと、帰国後に以下の三つの論文を書いた。

「スコットランドにおける炭坑夫の初期友愛協会」（『経済志林』56-3号、1988年9月）、「イングランド北部における炭坑夫の初期友愛協会」（同上誌、56-4、1989年2月）、「イングランド中央部における炭坑夫の初期友愛協会」（同上誌、58-3・4、1991年3月）。

『日本の伝統的労資関係—友子制度史の研究—』の出版後、さらに大正期、昭和期における友子の実態を追究し、8年ほど費やして以下の論文を書いた。

1990年10月「鉱夫の自主的労災救済制度の一考察—明治末・大正初期の友子の奉願帳制度の実態—」（『経済志林』58-1・2）。

1992年9月「足尾銅山における友子制度の変遷（上）—友子制度の企業内化を中心に—」、同上誌60-1・2）。

1993年3月、「足尾銅山における友子制度の変遷（下）」（同上誌，60-3・4）。

1994年7月、「別子銅山における友子制度の変遷—大正期の友子制度の企業内化を中心に—」（同上誌，62-1）。

1994年9月「大正期における友子の労働組合化について」（同上誌，62-2）。

1995年3月「昭和期における友子制度の変質と解体（一）—三菱鉱業の友子団体調査にみる友子制度の衰退状況—」（同上誌，62-3・4）。

1995年7月「昭和期における友子制度の変質と解体（二）—日立鉱山の友子資料『永代記録簿』にみる昭和期の友子制度の実態（1）—」（同上誌，63-1）。

1995年9月「昭和期における友子制度の変質と解体（二）—日立鉱山の友子資料『永代記録簿』にみる昭和期の友子制度の実態（2）—」（同上誌，63-2）。

1997年9月「戦後の北海道における友子制度—夕張市登川炭鉱の実態を中心に—」（同上誌，65-2）。

論文の題名からもわかるように、大正期、昭和期の友子の実態、とくに足尾、別子の友子を典型とする友子の企業内化（企業による友子の従業員団体化）、友子の労働組合化の分析は、これまで殆ど明らかにされていなかった日本における労資関係の重要な一齣を解明し、また昭和期の友子の分析も、企業内化されたにもかかわらず、一定の独自性をもって存在していた友子像を明らかにしえた。

以上で私の友子研究は終了したが、一冊にまとめた徳川時代から明治期にいたる友子制度史の実態の解明と、大正期、昭和期の友子制度の実態をかなり明確に捉えることによって、私は、友子制度の歴史をほぼ全面的に解明できたと確信している。ただし大正、昭和期の友子については、前著の続編として出版したいと願っていたが、今までその機会がなかった。

続編を出版できなかったかわりに1998年に、これまでの友子研究を総括して書きおろし、『日本の鉱夫—友子制度の歴史—』（世界書院）を、友子史の通史として出版した。『日本の鉱夫』については、友子研究の同学の士である市原博の書評（『大原社会問題研究所雑誌』1999年5月号）があるが、友子研究を踏まえたものだけに丁寧な批評となっている。その他、寺島敏治の書評がある（『地方史研究』1999年2月号）。

1980年代の実証的な研究として忘れ難いのは、兵庫県労働局の兵庫県労働運動史の執筆への参加であった。

大学時代からの友人で労働組合史のエキスパート渡辺悦次に頼まれて、1970年代末に兵庫県労働局による戦後兵庫県労働運動史の研究プロジェクトに参加した。

私の担当は、鉱山労働史研究者として兵庫県下の戦後鉱山労働組合史の調査・研究であった。このプロジェクトは、20年計画で第1次計画5年の成果を刊行した。私は、「鉱山における労働組合」を執筆した（兵庫県『兵庫県労働運動史 戦後2 昭和二十年代』所収，1984年3月）。

そのために、春休みに三菱鉱業系の生野鉱山、その支山として発達してきた明延鉱山をまわって聞き取りとあわせて組合資料の収集にあたった。資料の提供を求めて養父郡の明延鉱山の組合事務所を訪れると、書記長が対応してくれて、資料は沢山あるらしかったが、すぐには応じてくれない。

そこで友子の話に及ぶと、なんと明延鉦山にも友子の資料が残っているという。

私は、「これはしめた、友子の資料が見つかるかもしれない」とひとしきり、友子の話をして書記長の関心をひこうと努めた。そうした話の中で、この鉦山でも、戦後労働組合史を出版する計画があり、2年間も専従を張り付けて準備したが、せいぜい資料整理や年表の作成段階にとどまり、未だに出版の目処が立っていない、と嘆かわしい事情がわかった。

そこで「義をみてせざるは勇気なきがごとし」とばかり、義侠心を發揮して、「組合史執筆のお手伝いをしましょうか」と切り出して、友子資料の入手をもくろみ、幾つかの友子資料を手に入れて帰京した。

それから3カ月後、書記長から「組合史の執筆はどうなったか？」との問い合わせがあり、単なる話でなく実際に取り組まなければならない話となって、少々慌てた。しかし地方の小さな鉦山の労働組合史を書くのも悪くはない、きっと勉強になると思って、引き受けることにした。しかしその年の12月の組合大会までに出版しないと、三役の首が飛ぶという話だったので、悲壮な決意をして、ほぼ3カ月かけて500頁近い原稿を書く羽目になった。

急遽、明延鉦山に赴き、組合事務所の倉庫から段ボール箱10個の組合資料を自宅まで送ってもらって、3カ月を労働組合史の執筆に専念した。

これが明延鉦山労働組合編『明延鉦山労働組合運動史』（恒和出版、1983年6月）である。ちなみに本書への書評には、洪野純一の兵庫県労働局『労働研究』（1983年11月号）がある。

これは、三菱鉦業傘下の組合員300人前後の小さな鉦山の30年に及ぶ労働組合の歴史だが、これまでの全日本鉦山労働組合連合会編『全鉦20年史』の歴史では読み取れない地域鉦山の労働組合の実態、とくに現場の労働組合活動のディテイルを描き出して、後世に残る労働組合史となっている。数多い労働組合史、とくに鉦山の労働組合史の中でも、自分で言うのもおこがましいが、管見するかぎり、最良の組合史となっている。

私は、戦後の労働組合史を、単産や大手労働組合史から学ぶのではなく、山奥の小さな労働組合の歴史から、鉦夫たちの顔が見える労働組合活動の実態、昭和20年代から30年代前半を風靡した職場闘争の実態を垣間見ることができた。この成果は、明確に論文化されてはいないが、私の労働組合論の基礎を形作った。

500頁近くの原稿を3カ月で書くことは、至難の業であるが、かつてレーニンが党大会の報告書数百頁を1日で書いたという話を思いおこしながら、自分の可能性を試してみた。これは、私の研究史において忘れ難い思い出の一つであり、この組合のリーダー達との個人的な付き合いを通じて私は、日本の労働者階級の実像と生き様を認識することができた。

その後、兵庫県労働運動史の研究では、1993年3月に『兵庫県労働運動史 戦後3 昭和三十年代（上）』が出版され、私は、第一章の四「全鉦一県下鉦山労働組合の活動」、五「金属一全国金属兵庫地本の活動」、六「化学」。第二章の第十二節「中立労連の結成と傘下組合の運動」。第十三節「産別会議解散・全金属の総評合流と金属労働運動」。第三章の第四節「県下鉦山労働組合運動の進展」、第五節「関西電力労組運動」、第八節「三井三池炭鉦争議の支援活動」、第九節「県下の私鉄労働組合運動の高揚」を執筆した。

また翌年1994年3月に出版された『兵庫県労働運動史 戦後4 昭和三十年代（下）』では、第一

章の第五節「中小企業の発展と中小労組の拡大」。第二章の第三節「機械金属産業の労働組合運動」、第五節「全鉱の合理化反対運動の一層の展開」、第八節「私鉄と運輸関係労組の運動」、第十節「IMF・JCの結成と県下の労働組合」を執筆し、兵庫県下の各種の単組の活動を知ることができ、建前ではない現実の労働組合運動が抱えてきた問題点を理解することができた。

しかしここで稼いだ稿料は、すべて友子研究の軍資金となり、友子研究を支えてくれたのであり、私は、科研費や財団の助成金なしに、もっぱら個人の費用で研究してきたので、この資金なしに、私の友子研究は実現しなかったであろう。思えば兵庫県労働運動史の研究に誘ってくれた旧友に感謝の気持ちでいっぱいである。

（つづく）

（むらくし・にさぶろう）